

《コミュニティ》

ちづ

鳥取県智頭町

「全国初の集落型NPOによるむらづくり」



鳥取県智頭町「全国初の集落型NPOによるむらづくり」

日本1/0村おこし運動

“ゼロ(無)からイチ(有)へ！” “自分たちのことは自分たちで！”

集落全員参加による交流と文化のむらづくり・小さな自治体づくり

智頭杉に囲まれた静かな山間部の集落。清流白坪川に沿って広がる棚田には雪が降り積もり、石積み的美しさに目を奪われる。その戸数わずかに18戸。高齢化と過疎化という悩みを抱えた典型的な限界集落の一つである。

集落の中心部に足を運び、「人形浄瑠璃の里」と刻まれた石碑があり、その側に喫茶「清流の里新田」と宿泊施設「人形浄瑠璃の館」がひっそりとたたずむ。

ここが、^{しんでん}新田集落のむらづくりの拠点である。

「全国初といわれる集落型NPOが、なぜこの地で誕生したのか？」、「各界の有識者が、なぜこの集落に足を運び、わずか50名の集落の人々を前に話をするのか？」等、疑問はつきない。

智頭町が進めてきた「日本1/0村おこし運動」(通称:ゼロイチ)を活用しながら、20年にわたり、新田集落で地道に継続されてきた物語を紹介したい。



取り組み概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

取り組みの目的

新田集落の活性化のため、各種むらづくり事業を行い、新田集落の発展に寄与することを目的として活動している。

取り組みの内容

(1) 交流事業

- ・大阪いずみ市民生協との交流(農業体験、林業体験等)
- ・「田んぼの学校」(大阪と地元の子どもたちの合同での体験型合宿)
- ・喫茶「清流の里 新田」、宿泊施設「人形浄瑠璃の館」、ロッジ「トンボの見える家」の整備・運営

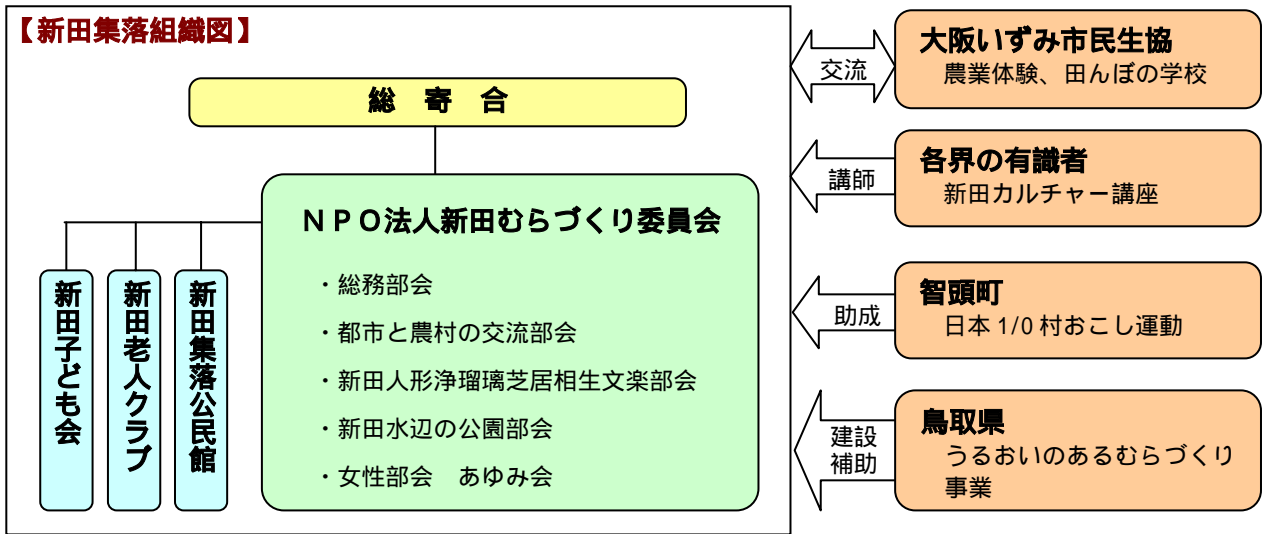
(2) 文化事業

- ・新田人形浄瑠璃の上演、伝承
- ・新田カルチャー講座の開催(2000~2010年まで122回開催)

取り組み主体

- ・NPO法人新田むらづくり運営委員会

取り組みの体制



取り組みのポイント

1. 「やってみよう」というチャレンジ精神と、計画的なむらづくり
 「農村と交流をしたい」という大阪いずみ市民生協との出会いを活かし、都市との交流事業をスタート。交流を重ねながら、計画的に交流拠点等を整備してきた。
2. 新田カルチャー講座等を通じた視野の広がり
 閉じこもりがちな山間部の集落にあって、「広い視野を持つことが必要」との信念のもと、各界の有識者を集落に招き、10年間毎月欠かさず講座の開催を継続してきた。
3. 人形浄瑠璃の伝承を通じた心の和づくり
 幕末から伝わる人形浄瑠璃の伝承を通じて、集落の人々の心の和をつくってきた。
4. 智頭町をあげての「日本1/0村おこし運動」への参加
 智頭町をあげての「日本1/0村おこし運動」にいち早く参加し、他の自治体への視察研修や、ゼロイチに取り組む他の集落との交流を深めながら、活動を20年にわたり継続してきた。

取り組みによる成果

- ・住民間のコミュニケーションの活性化
- ・都市との温もりのある交流と移住者の誕生
- ・交流施設の計画的な整備

今後の展望

- ・むらづくりの後継者の確保・育成とNPO法人の経営の安定化
- ・人形浄瑠璃の次世代への継承やまさと
- ・山郷地区全体での取り組みの展開

智頭町の概況

古くから人の往来が絶えない交通の要衝

智頭町は、鳥取県の東南、岡山県に接する県境に位置する。町の周囲は1,000m級の中国山脈の山々が連なり、その山峡を縫って流れる川が智頭で合流し、千代川となり日本海に注いでいる。長い歳月を経て、あの鳥取砂丘の砂を育んだ源流のまちでもある。気候は、日本海側気候に属し、冬に雪が多いのが特徴である。

町面積の93%を山林が占めており、スギをはじめとする緑が一面に広がる。主産業である林業の歴史は古く、町内には「慶長杉」と呼ばれる樹齢300年以上の人工林が残る。吉野杉や北山杉と並び、「智頭杉」の評価は全国的にも高い。

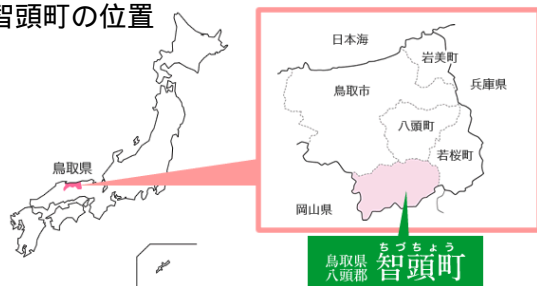
古くから智頭は、山陰と山陽、近畿とを結ぶ交通の要衝として人の往来が絶えない町であった。町内で見つかった縄文時代の遺跡は、山間部における古代人の往来を示すものであり、考古学上の貴重な発見とされている。江戸時代には、智頭往来（因幡街道）と備前街道が交わる鳥取藩最大の宿場町としてにぎわった。今も、その名残を留め

る史跡や道標等と共に、趣のある千本格子の民家や古社寺、造り酒屋等が並び、往時を偲ばせる情緒豊かな古い町並みが残っている。智頭宿の中央に位置する石谷家住宅（重要文化財）は、敷地3,000坪、広大な池泉式日本庭園を中心に40の部屋と7棟の蔵を有する大規模な近代和風建築であり、江戸、明治、昭和それぞれの建築様式と技術の変遷を体験できる貴重な建築とされる。

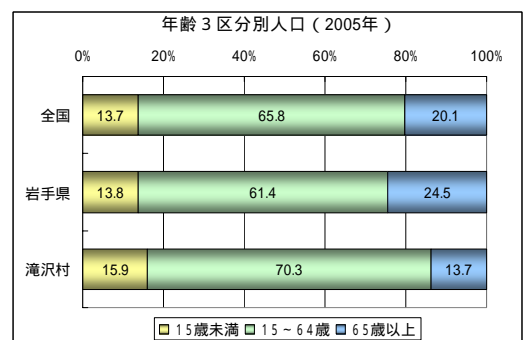
大正3年に町制を施行し、昭和10年に智頭町、山形村、那岐村、土師村が合併し、さらに翌年11年に富沢村、昭和29年に山郷村との合併を経て、現在に至っている。

鳥取市内までは車で30分、津山市まで約40分の距離にあり、鳥取市や津山市まで勤めに出ている人も多い。林業で栄えた1960年代には人口は1万5千人近くであったが、林業の衰退により、毎年100名ずつ減少し、2011年1月には、人口8,130人、高齢化率34.8%となっている。過疎化と高齢化という課題を抱えた典型的な中山間地である。智頭急行や高速道路の整備によって、大阪から2時間圏内となり、観光客が徐々に増え、2009年度には年間16万人となっている。

智頭町の位置



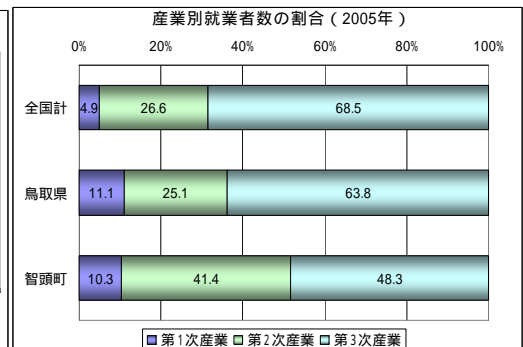
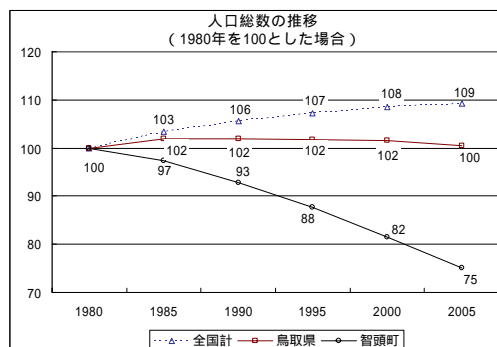
出典) 智頭町HP
http://cms.sanin.jp/p/chizu/kikaku/abo_ut_chizu/
 (2011/02/09 参照)



< 智頭町へのアクセス >

東京から
 東京駅から新幹線・JR
 線で約4時間30分

 大阪から
 大阪駅からJR線で約
 2時間



出典) 総務省統計局: 国勢調査



石谷家住宅（重要文化財）

1999年の特別公開（1週間）で1万5千人の人が訪れたことが契機となり一般公開されることとなった。



森林セラピー



森のようちえん「まるたんぼう」

“生きる力”を自然の中で育む北欧発の幼児教育子どもを通わせるために智頭に移住した方もいる。

出典)智頭町資料

みどりの風が吹く “疎開” のまち智頭

智頭町では、町全体をエコミュージアム（田園空間博物館）とする交流観光のまちづくりを進めている。代表的な地域資源である板井原集落（伝統的建築物群保存地区）は、平家落人の隠れ里と言いつた集落であり、日本の山村集落の原風景（昭和30年代）が残る全国的にも希少な集落とされている。

また、豊かな森林を活かして、森のようちえん「まるたんぼう」の開園（2009年）、森林セラピー基地の認定、日本で最も美しい村連合加盟（2010年）等、地盤沈下の続く「農」と「林」にあえて光を当てた施策を展開し、訪れる人がほっとできる癒しの町として、都会のストレス社会から「疎開」できる町を目指した取り組みを着々と進めている。

美しい棚田が広がる静かな山間集落・新田

智頭町には89の集落があり、その1つが新田集落である。町の南部に位置し、智頭駅から車で15分ほど登った標高450mの山間部にある。きれいな空気と水と緑に囲まれた集落は、春の田植え時期には水面が光輝き、秋の収穫時期には、一面が黄金に輝く稲穂が風にたなびく、のどかな田園風景が広がっている。

新田集落の歴史は古く、約360年前の江戸時代・正保2年（1645年）の開拓によりできた村である。総面積474haのほとんどが山林（スギ、ヒノキ）であり、主な産業は農林業である。特に新田で育った杉は「智頭杉」として全国的にも有名である。新田集落の農地はわずかに8haであり、集落の中央に流れる清流・白坪川の両岸に棚田がみられる。田んぼの石積みは、江戸時代の石工の手によるもので、地元の人によって大切に保存されている。

新田集落の人口は、智頭町に編入された直後の1955年には22戸・107人であったが、進学や就職等により若い人が村を出て行ったため減少傾向にあるものの、村おこしを契機としてIターン等で移住する世帯もみられ、2011年2月現在では18戸・約50人となっている。

集落の課題は過疎化・高齢化である。高齢化率は60%を超えており、いわゆる「限界集落」となっている。例年一冬の間には3.3mの雪が降る。通勤・通学時間の前の雪かきも、高齢化した集落には大きな負担となっている。また、林業の低迷により、山の手入れが行き届かない等の課題も抱えている。



新田集落の全景

出典)新田むらづくり運営委員会資料



美しい棚田

出典)智頭町資料

取り組みに至る経緯

大阪いずみ市民生協との出会い

林業と農業で生活を支えることが出来ていた1950年代、新田集落には100人を超える人が住んでいた。しかし、過疎化が進行し、いつのまにか集落の人口は50人不足となっていた。智頭町でも、周辺自治体との合併が取りざたされるようになり、過疎化や高齢化が進む中で「このままでは集落が消滅してしまう」と住民たちは集落の将来に危機感を抱くようになっていた。

ちょうどその折、大阪いずみ市民生活協同組合（大阪府堺市）が組合員向けの保養地を探しており、「芋掘りや田植え、稲刈り等の農業体験をしたい」という相談が智頭町役場にあった。最初、町内の別の場所が候補となっていたが、受け入れ体制の確保が難しかったことから、「他に元気のある村はないか」ということで、新田集落に白羽の矢が立った。智頭急行の駅が近くに設置されることも決まっており、駅から歩いて2kmぐらいの距離であったことも新田が選ばれた要因の一つであった。生協から下見に来た際にも、景色も空気もきれいで、棚田も残っており、景観がよく、水がきれいなことに満足したようであった。

1991年5月に、親子をたくさん乗せた大型バス3台が新田集落に初めてやってきた。5月の田植えにはじまり、6月にはさつまいもの苗植え、秋には稲刈りとさつまいも掘りと、1年を通して

農業体験ができるプログラムを組んだため、全部来られる人は年4回智頭町に来ることになる。食事は、地域の女性が炊き出しをした。

こうして、1991年から都市部の消費者をターゲットにした体験型交流事業を軸とした集落活性化の取り組みが始まった。

四次にわたる総合計画の策定

交流事業を重ねて行くうちに、「もう一度、かつての村を取り戻し、子どもたちの賑やかな笑い声を聞きたい」という願いが住民の間に浸透すると共に、「子どもたちの賑やかな笑い声が聞こえる村を次代へ引き継ぐことが“いま”ここに住む私たちの責務ではないか」と考え、村おこしに取り組むようになった。

このような取り組みを計画的に進めて行くための工夫として編み出されたのが、1994年に初めて策定された新田集落の「総合計画」（集落活性化計画）である。計画の策定にあたっては、子どもから高齢者まで集落の全員を対象としたアンケート調査等も行った。

総合計画はこれまで4次にわたり策定されており、その概要を以下に紹介する。

1994年に策定した「第一次総合計画（94～98年度）」は、人口の減少と高齢化により、集落としての自治機能の維持が困難になるとの危機感から、「若者が定住する活気ある村」をつくるべく策定されたものであり、都市との交流を軸とした拠点整備等が位置づけられた。それに基づき、



第四次総合計画

整備されたのが「人形浄瑠璃の館」(1995年開設)や「清流の里新田」(1999年開設)である。都会の人たちを受け入れる交流拠点・活動拠点として、また、宿泊施設として活用している。

また、「第二次総合計画(99~03年度)」では、21世紀を“こころの時代”と位置づけ、教養の向上をめざし「新田カルチャー講座」の開催を計画に加えた。

「第三次総合計画(04~08年度)」では、町村合併の機運の高まる中、合併により周辺地域となっても中心地に劣らないようにするため、“自分たちのことは自分たちで”をキーワードに「小さな自治体構想」を計画した。

現在の「第四次総合計画(09~13年度)」では、高齢化時代を迎え、福祉の充実、ソフトの充実に要点をおき、さらに就労の困難な時代でもあることから、事業の拡大により雇用の場の創出に積極的に取り組むこととしている。

日本1/0村おこし運動(ゼロイチ)への参加

第一次総合計画を進めている間に、智頭町全体の取り組みとして、1997年から「日本1/0村おこし運動」(以下、ゼロイチという)がスタートした。このネーミングには、無(ゼロ)から有(イチ)への一步を、住民自らが汗を流して踏み出すという意味合いが込められている。この運動では、「住民自治」を大切にすると共に、当時ではまだ珍しかった「地域経営」という概念を打ち出したことに特徴がある。ゼロイチへの参加



新田周辺イラストマップ

出典)新田むらづくり運営委員会資料

にあたっては、集落全戸の同意のもと、従来の村組織とは別に「集落振興協議会」を立ち上げる。リーダーを民主的に選出した上で、10年後の集落の姿を集落全員で描き、「自分たちの集落を自分たちの手で動かして行く」のである(ゼロイチの概要については後述している)。

「ゼロイチ」が始まった時、新田集落では、都市との交流事業が軌道に乗ってきていたこともあり、「その意義についての集落の方の理解が早かった」と岡田一氏(新田むらづくり運営委員会初代理事長)は当時を振り返る。こうして、新田集落は、初年度(97年度)にゼロイチをスタートさせた7集落のうちの1つとなった。

ゼロイチに参加した10年間の間に、町から合計300万円の活動助成を受け、その殆どを視察・研修の費用にあてた。長野県四賀村や長野県小布施町、熊本県小国町、愛媛県久万高原町等、元気な村づくりに取り組んでいる地域を見つけ、集落全員で訪れ、現地を見学し、現地の人たちと交流した。いきなり地元のラジオに招かれ出演することになったこともあったという。「ゼロイチは良かった。活動の土台ができた」、「みんながまとまった」と岡田一氏はゼロイチの効果を語る。



大阪いずみ生協との交流



体験農園

出典)新田むらづくり運営委員会資料

「新田むらづくり運営委員会」の誕生

都市との交流を進めて行くための体制として1991年に立ち上げていた「新田集落振興協議会」を、ゼロイチへの参加に伴って、1998年に「新田むらづくり運営委員会」に組織改変した。さらに、2000年にはNPO法人格を取得し、NPO法人「新田むらづくり運営委員会」とした。1995年に発生した阪神・淡路大震災を受けて、ボランティア活動を活発にしたいという想いがあったという。法人格の取得には、「自分たちのことは自分たちでやって自立しよう」、「自分たちで地区を運営しよう」という、地元住民の強い意思が込められている。法人格をとったほうが、智

頭町からも支援を受けやすいとも考えた。こうして全国初となる、集落全世界帯を構成員とする集落型NPO法人が誕生した。

「新田むらづくり委員会」の役員は、理事5人、監事2人の合計7名。当初は、男性ばかりが役員に名を連ねていたが、宿泊施設や軽食喫茶の運営もしており、「女性の力も必要」ということで、今は女性にも役員になってもらっている。5つの部会を設けているが、実際には、集落全員が様々なことを協力して活動を進めている。住民からは会費を集めておらず、宿泊施設や喫茶の収益やロジの賃貸料等で運営費をまかなっている。村の共有林もあるが、「今は安いので伐らない」とのことであった。



新田むらづくり運営委員会 理事
おかだはじめ
岡田一 氏



新田むらづくり運営委員会の初代理事長。新田カルチャー講座の講師依頼のため東京や京阪神まで何度も足を運ぶ。そのネットワークは今なお続く。森林組合に勤めていた。

「自分たちのことは自分たちでやって自立しよう」

Q. 集落型NPOを立ち上げてのむらづくりにどのような苦労がありましたか？

大阪いずみ市民生協との交流が軌道に乗りつつあり、色々なことにチャレンジできました。ただ、収益事業に課税され、非収益事業に資金をまわせないのは何ともいえませんね。集落のみなさんに、わずかでも協力のお礼をしたいと思うのですが、なかなか余裕がありません。

Q. 第4次総合計画では福祉や雇用創出を目指されていますね。集落にショートステイの施設ができれば、高齢者も安心だし、雇用も創出できる。過疎化を止めるモデルになると思います。国に提案をしたこともあるのですが、なかなか話は進みませんね。

Q. 町の職員への期待は？

職員の皆さんには、生活のために働くだけではなく、地域のリーダーとなり、地域を外から応援し、指導してもらいたいと思います。町の職員が、地域に顔を見せてくれるだけで、我々は嬉しく思います。また、家に帰ったら率先して地域でも活動して欲しいですね。



田んぼの学校

出典)智頭町資料



喫茶「清流の里 新田」

喫茶・売店のほか、人形浄瑠璃を上演ができる広間がある。



現在の取り組み

(1) 交流事業

大阪いずみ市民生協との交流

堺市に本部のあるマンモス生協、大阪いずみ生活協同組合との交流では、春の田植えやサツマイモの植え付け、秋の稲刈りやイモ掘りが恒例イベント。年間を通じた植林・下刈・間伐等の林業体験も行った。農業体験に来られた方は老若男女様々。大阪いずみ生協と新田集落の双方をあわせて100～150人が参加した。活動が始まってから4、5年ほど経った頃から民泊がはじまり、参加者も毎回来村することで、新田の人たちとすっかり顔なじみになり、年間を通じて親しく交流している家庭もみられるようになった。最初の2年間は大型バスで来られていたが、収穫物を持って帰るのが大変であったため、自家用車での来村が次第に増加した。

毎年11月には、大阪府立大学キャンパスを会場に、大阪いずみ市民生協と大阪府立大学生協の共催で「生協まつり」が開催され、新田集落からも参加して農林産物を販売した。「2時間も前から並んで買う人がいて大盛況で楽しかった」と岡田和彦氏は語る。

「田んぼの学校」の実施

夏の催し「田んぼの学校」とは、未来を担う子どもたちが、土をいじったり、小さな生きものを観察しながら、自然に接することで、本当の豊か

さとは何かを学び、健やかに育ってくれることを願って始めた合宿形式での体験学習会である。当初の日帰り事業から1泊2日事業に拡大し、2010年度で12回目の開催となった。

参加者は、大阪の子どもたち20名、地元の子供たち20名の合計40名で、星空の勉強や川の水棲生物・山野草の研究、野鳥の観察、登山等を1泊2日で行う。講師は県内のいろいろな先生にお願いしている。親はついてきてはいけない決まりとなっており、高速バスの停留所まで見送りに行き、帰る際には停留所まで迎えに行く。子どもたちに自主性を発揮してもらうため、集落の大人たちもほとんど見守るだけである。

「いずみ生協との交流が20年も続き、参加してくれた子どもたちが大きくなって、時には自分の子どもを連れて来ることがある」、「将来的には、1週間から10日間ぐらい連泊して夏休みを過ごせるようにしたい」と岡田一氏は語る。

喫茶「清流の里新田」、宿泊施設「新田人形浄瑠璃の館」ロッジ「とんぼの見える家」の運営

村づくりの様々な活動のための運営費を生み出しているのが喫茶「清流の里新田」と宿泊施設「人形浄瑠璃の館」、農地付きの滞在型ログハウス「とんぼの見える家」の3施設である。都会の人が自然に触れ、のんびりと気持ちよく過ごせるようにと、1994年に策定した第1次総合計画に基づき整備をしたものである。



ロッジ「とんぼの見える家」

施設整備にあたっては、県の「うるおいのあるむらづくり事業」を活用した。事業費の 4/5 を県と町が出し、地元が 1/5 を負担する。同事業を活用して、新田集落で老朽化していた公民館を建て替えて、施設を整備した。

地元の負担は総額 1,800 万円に上ったが、集落の共有林を伐採したり、共有林の中の林道の補償金等を活用し、なるべく個々の世帯の負担がないようにした。

建物は町有施設であるが、管理運営はNPO法人が行っている。伝統の人形浄瑠璃芝居「相生文楽」の公演、交流事業の宿泊研修、新田カルチャー講座等に施設をフル活用してきた。新田集落の女性たちがローテーションを組んで、交代で食事をつくったり、宿泊者の世話をしたりしている。

田舎料理を提供する喫茶「清流の里新田」には、観光や視察等で年間 3,000 人が訪れ、観光客は地元の食材を使った料理を味わうことができる。また、明治から集落に伝わる「絵本太閤記」等の人形浄瑠璃を公演する広間もある。

ロッジ「とんぼの見える家」は、地元産の杉の木をふんだんに使ったログハウスである。ネーミングを考える際、集落に生息する「ほたる」にちなんだ案もあったが、「他にない名前を」ということで、いろいろな「とんぼ」が飛び交う集落の特徴をあらわす今の名前がつけられた。

ロッジは 3 棟整備されており、そのうち 2 棟は、1 a ずつの農地を付けて、農業体験を希望する家族に年間 50 万円で賃貸している。NPO 法人の安定的な収益源となっている。



新田人形浄瑠璃の公演

出典) 新田むらづくり運営委員会資料

建設後 10 年が経過し、入居者は多少入れ替わりもあったが、うち 1 世帯は既に 8 年ほど居住している。従来は年配の居住者が多かったが、2011 年 1 月から新たに住み始めた世帯は北海道から移住してきたファミリーである。「小学生のお子さんが 2 人おられ、地元の小学校の児童数が 17 人から 19 人へと 1 割も増えたんですよ」と新田むらづくり運営委員会理事長の岡田和彦氏と岡田一氏は声を揃えて嬉しそうに語る。

(2) 文化事業

新田人形浄瑠璃の上演、伝承

新田集落で人形浄瑠璃が始まったのは幕末から明治にかけての頃である。当時、この 20 戸程の集落で博打がはやり、田畑を手放すことになってしまった若者が出て行ってしまった。「このままでは集落が駄目になってしまう」ということで「もっと健全な娯楽を」と、岡田太平治等の青年たちが人形浄瑠璃を思い立ったと伝えられている。明治 6 年頃に人形を 3 体つくるところから活動が始まった。人形を動かすためには、人形の遣い手が 3 人必要である。1 人は頭と右手、1 人は左手、もう 1 人は足もち、3 人が心を合わせなければ人形は操れない。人形を 5 体動かそうとすると遣い手が 15 人必要になることから、若者だけでなく皆でやろうということになり、「相生会」という会ができた。人間国宝である桐竹紋十郎の指導を受けた際、「相生文楽」と命名するように指導され今に至っている。

新たに整備された「でこ蔵」(倉庫)には、町



人形(でこ)を囲んで



人形浄瑠璃体験

出典) 智頭町資料

の重要文化財の指定を受けているものを含めて、76体の人形(でこ)をはじめ、舞台上使われる数々の道具が大切に保管されている。

以前は、上演回数は年1回であったが、NPO法人となってからは年間15回程上演するようになった(予約制)。県内はもとより、山口市や淡路島、勝山町(岡山県)等、県外で公演したこともある。

NPO法人を立ち上げるまでは、男性ばかりが遣い手であったが、女性にも参加を呼びかけ、現在は男性15名、女性10名の体制で人形浄瑠璃をしている。遣い手の平均年齢は70歳を上回っており、後継者の育成や人形の保存が課題となっている。



新田むらづくり運営委員会 理事長
おかだかずひこ
岡田和彦 氏



新田むらづくり運営委員会の現理事長。人形浄瑠璃の人形(でこ)を手に取り、説明していただいた。町役場に勤めていた。

「遣い手3人が心を合わせなくてはなりません」

Q. 人形はどのように動かすのですか？

人形の頭かしらには、「たち」(男の子)と「がさ」(女の子)があります。新田集落には76体の頭があり、手の五本の指が動く精巧なものもあります。これを3人一組になって操ります。自分の担当だけでなく、他の2人の動きも頭にいれておかないといけないので動きを覚えるのが大変です。今は4つの演目をしています。

Q. 人形浄瑠璃を伝承していくための課題や、これからの方向性を教えてください。

人形浄瑠璃を残していきたいというのは、集落みんなの思いなのですが、遣い手の平均年齢は、70代に達しています。以前は三味線や歌を歌う人もいたのですが、今はテープに録音したものを流して公演しています。例えば、中学校の部活として取り組んでいただくと、我々も張り切って指導したいと思うのですが、指導者が見つかりません。名人によって作られた大変貴重な人形もあるのですが、補修には多額の費用がかかります。

浄瑠璃をしている地域は中国地方には他に希少価値があると思います。東京では若い人が文楽を見に来るそうです。定期公演ができれば、広く知れ渡っていいかもしれませんね。



新田カルチャー講座

出典)智頭町資料

「アメリカの窓から日本が見える」
「5万年に一度、火星大接近！」
「どうする日本の農業政策」
「あの感動、スポーツが人を育てる」
「趣味のそばづくり」
「お金のながれと私たちの暮らし」
「我が村の林業再生と過疎対策」
「可能性いっぱいの、山間集落」

新田カルチャー講座の多彩な演題

新田カルチャー講座の開催

山村で暮らしていると内に閉じこもりがちになるため、外に視野を広げることを目的に、2000年から、毎月1回、「新田カルチャー講座」を開催するようになった。

講師は県内の人が多いが、京阪神や東京からも交通費程度の謝金で講師を招いた。講師は学識者や文化人、政治家、改革派の首長、弁護士まで様々。演題も、「アメリカの窓から日本が見える」、「新田寄席」、「宇宙のはてはどうなっているの?」、「地方に元気なむらを - 首都圏から山間集落をみる -」、「水彩画を楽しみませんか」、「次世代改革と地域おこし運動」等バラエティに富んでいる。講座の会場は喫茶「清流の館新田」の広間。平均20人ほどの聴講があった。最も参加者が多かった時には400人の参加があり、別室にモニター中継したほどであったという。2000年6月から、2010年6月に開催した第122回まで、10年間毎月欠かさず開催された。

「講演の依頼にあたっては、本人に会えるまで何度も訪問する等、直接、お顔を見てお願いすることにこだわった」、「門前払いをされることもあったが、勇気を出して頑張った」、「次は誰に頼もうかというのをいつも考えていた」、「10年間続けてきたので、少しゆっくりしようと休んでいるのですが、カルチャー講座を開催しないのかといった声も時折あります」と岡田一氏は語る。

取り組みのポイント

「やってみよう」というチャレンジ精神と、計画的なむらづくり

「このままでは集落が消滅してしまう」との危機感のもと、「農村と交流をしたい」という大阪いずみ市民生協との出会いを活かし、手探りの状態のまま都市との交流事業をスタートさせた。

交流を重ね、手ごたえを感じながら、集落の全員で話し合いを重ね、将来の夢や実現したいアイデアを4次にわたる「総合計画」に落とし込み、県の補助金や町のゼロイチの助成等を活用し、夢を一つずつ形にしていっていった。

新田カルチャー講座を通じた視野の広がり

閉じこもりがちな集落にあって、「広い視野をもつことが必要」との信念のもと、都市住民との交流や新田カルチャー講座の開催等、外とふれあう機会を意識的に作ってきた。村にいながらにして各界の有識者の講演を聴くことが、住民にとって大きな刺激となった。

世の中の大きな動きを感じ取り、市町村合併のうねりを肌身で感じるにつれて、「周辺部はこのままでは危ない」、「自分たちの地域は自分たちでなんとかしないと」という自立心が高まると共に、“小さな自治体構想”を計画にするにいたった。



宿泊施設「新田人形浄瑠璃の館」
出典)新田むらづくり運営委員会資料

人形浄瑠璃の伝承を通じた心の和づくり

NPO法人化をきっかけとして、幕末から集落に伝わる「人形浄瑠璃」の伝承に本格的に取り組むようになった。以前は年1回のみ公演であったところ、予約制ではあるが、年間15回ほど公演するようになった。近年は、女性にも遣い手をしてもらう等、体制も広げてきている。3人が息を合わせて一体の人形を操る人形浄瑠璃が村の和をつくってきた。

智頭町をあげての「日本1/0村おこし運動」への参加

智頭町をあげての「日本1/0村おこし運動」に真っ先に手をあげ、集落全員で先進事例といわれる地域を視察し、様々なことを学ぶと共に、集落の団結を強めた。また、ゼロイチに取り組む他の集落との交流は、村づくりの意欲をさらに高めることにつながった。

“小さな自治体”を構想する中で、NPO法人の収益を活用して、徐々にではあるが「集落活性化基金」を積み立てている。集落内の生活道路や水路の補修等「小さな公共事業」の費用や、イベント協力者へのささやかな謝礼として活用して行く予定である。



新田集落の皆さん
出典)智頭町資料

取り組みの成果

住民間のコミュニケーションの活性化

村づくりに取り組むようになり、都市との交流や新田カルチャー講座等を通じて、外の人との交流が刺激となった。それに伴って、「次はどうしよう」、「こんなことをしてはどうか」等、住民間のコミュニケーションも活性化した。

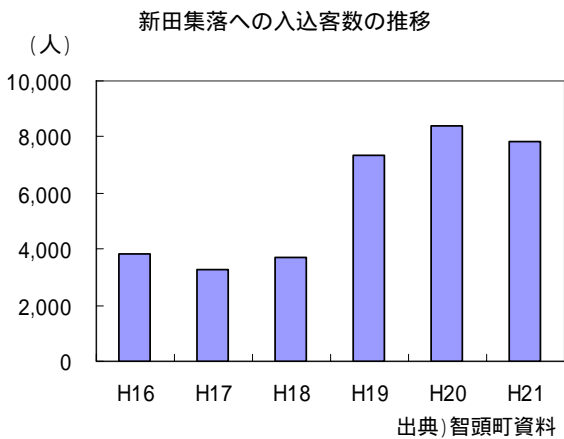
また、喫茶「清流の里新田」ができたことによって、集落にたまり場ができた。1日中家にいると息が詰まることもある。そんな時に「誰がいるか」といって、顔をのぞかせる人も多いという。

都市との温もりのある交流と移住者の誕生

都市の人たちとの親睦が深まり、家族ぐるみでの交流へと広がっている。また、都市との交流事業を通じて、新田集落を何度も訪れていた方が、新田集落を気に入り、集落の古民家に移住するということがあった。ロッジ「トンボの見える家」にも入れ替わりはあるものの、様々な人が入って来ることで、集落に活気をもたらしている。

交流施設の計画的な整備

都市との交流を続けて行く中で、県の補助金を活用し、宿泊施設や喫茶等の交流施設を徐々に整備してきた。拠点ができることで、活動がさらに充実したものとなると共に、わずかではあるが収入を得る機会をもたらした。ロッジ「トンボの見える家」の賃貸料(50万円/年間×2棟)は、貴重な安定収入となっている。



これらの取り組みが評価され、新田集落は1996年度に農林水産省等が主催する「オーライ！ニッポン大賞」の審査委員会会長賞を受賞した。また、2009年1月には「にほんの里100選」（朝日新聞社、森林文化協会共催）の一つとして新田集落が選ばれた。

今後の展望

村づくりの後継者の確保・育成とNPO法人の経営の安定化

新田集落の村づくりがはじまって20年がたち、活動をひっぱってきた世代は70代を迎えた。2000年から毎月欠かさず続けてきた新田カルチャー講座も、10年間を一区切りとして、活動を見直すこととした。住民の高齢化が進む中で、村づくりの活動をいかに継続して行くかが課題となっている。

NPO法人としての活動も、一時期は1,000万円近い事業規模となっていたこともあるが、最近では500万円前後で推移している。ロッジ「とんぼの見える家」について、これまで年間賃貸に出していなかった残りの1棟についても、安定収入を期待して、年間賃貸の導入を検討している。

また、情報発信や広報が十分できていないとの認識もあり、それを補う一つの試みとして、農林水産省の「田舎で働き隊！」に応募し、2011年2月から1ヶ月ほどの期間であるが、若者に村に来てもらい仕事を手伝ってもらうことにした。



新山郷村テント市
福原パーキングエリアの活用を進めていくため、
青空市を試験的に開いた。

出典) 智頭町資料

人形浄瑠璃の次世代への継承

幕末から受け継いできた人形浄瑠璃の次世代への継承も大きな課題である。集落の住民に人形浄瑠璃についてのアンケートを行ったところ、100%の住民が「残したい」「残すべき」という回答であった。しかし、人形浄瑠璃を継承して行く後継者はまだはっきりとはみえていない。また、人形（でこ）の保存も課題である。多額の費用がかかることから修理ができていない人形もある。

山郷地区全体での取り組みの展開

1997年にはじまったゼロイチ運動は、「集落」単位の取り組みから、「地区」単位の取り組みへと進化しつつある。2007年には、新田集落を含む6つの集落が参加して、山郷地区振興協議会が設立された。同協議会では、「福原パーキングエリアを活用した交流観光」や、まもなく廃校となる山郷小学校の「校舎の有効活用」等、集落単位では取り組むことが難しいテーマをとりあげ、動き出したところである。集落単位での村づくりと、地区単位での地域活性化の取り組みの連携についてもこれからの検討課題となっている。

新田集落は、2006年度をもって、当初の支援期間の10年がたち、ゼロイチ運動からの第1期の“卒業生”となった。自分たちで進む道は決める。18世帯の目標は「日本一小さい自治体」である。しっかりと先を見据えて、ゆっくりではあるが、新田集落は今も動き続けている。



山郷地区振興協議会 事務局長
はがりけんいち
葉狩健一 氏



学生や独身の頃は智頭を離れていたが、結婚を機に智頭に戻る。鳥取県庁に勤めながら、集落の寄り合いや活動にも参加している。

「地区ゼロイチがなければ、取り組めなかったことも…」

Q. 山郷地区振興協議会が目指すところは？

協議会の立ち上げにあたって、地区の将来像をみんなで話し合い、4つのキーワード（自治・食・交流・人）が浮かび上がり、目指すところを「安全・安心な地域づくり」としました。

Q. これまでの主な取り組みは？

活動をはじめて2年余りになります。住宅用火災警報器の全戸設置、都会の子どもたちとの地産地消での交流、起業を志す若者の研修会の受け入れ（民泊付き）、森づくりの研修、歴史の道ウォーク、「我が家の味自慢コンテスト」、福原パーキングエリアを活用した「新山郷村テント市」（高速道路と地域とのつながりを考える社会実験）等に取り組みました。地区ゼロイチがなければ、取り組めなかったこともあります。今後は、廃校となる山郷小学校の空き校舎の活用や、地域の小さな経済をどうやって起こしていくかということに取り組みたいと考えています。

Q. 今後集落の規模が小さくなった時、地区としてどのように支えていこうと考えていますか？

まだ、そこまでは考えていません。ですが、それぞれの集落で暮らし続けていくために、集落だけではカバーしきれない課題について、対応を考えていくことも必要になってくるように思います。



智頭町役場 企画課
にしがわこういちろう
西川公一郎 氏



町職員として、交流観光のまちづくりなどを担当し、2010年度からゼロイチを担当。以前は、町職員PTとして地域に参画し、ゼロイチをずっと見守ってきた。

「“ゼロ”から“1”を起こすことが大事！」

Q. 「ゼロイチ」はどのようにして、生まれてきたのですか？

1988年に住民主体で始まった「智頭町活性化プロジェクト集団（CCPT）」が、ログハウス群の建設、地元住民と研究者による勉強会（さんかそん）「杉下村塾」の開催、海外への青少年派遣等、様々な活動を10年近く続けていました。ある時、スイスのペイダンオという村の住民自治を学ぶ機会があり、そこへ那岐郵便局長の寺谷氏が訪問し、住民自治のコンセプトが生まれました。「“ゼロ”から“1”を起こすことが大事。“1”が起きれば“2”“3”と起きていく」と信じて住民皆さんが取り組みを続けてきました。京都大学の岡田憲夫教授と杉万俊夫教授には「CCPT」をはじめ、「ゼロイチ」の立ち上げ、集落での村おこしのサポート、ゼロイチにかかわる研究など、大変お世話になりました。

Q. 「ゼロイチ」が始まって14年。これまでの成果をどのように見ていますか？

智頭にある89集落のうち、16集落がゼロイチに参加しました。参加にあたっては集落全戸の同意を求めるなど高いハードルを課しましたが、全体の2割が「自ら動き」ました。各集落に動ける集団ができたのは智頭の大きな財産です。機が熟して物事が起きるにはやはり10年がかかります。新田集落のように継続が大事だと思います。

Q. 集落「ゼロイチ」から、地区「ゼロイチ」へと進化させた狙いは？

企画当初から想定されていましたが、観光・教育・福祉など、集落の規模では取り組みにくいことや、小学校の統廃合後の空き校舎の活用などをテーマに、地区単位での活性化につながればと期待しています。しかし、単なる“旧村がえり”ではなく、地域自らの意志による新しい「自治」活動が芽生えればと期待しています。

「日本1 / 0村おこし運動」とは・・・

智頭町が1997年度に制度化した「日本1 / 0村おこし運動」とは、閉鎖的・保守的・依存的な旧態依然とした村社会の変革を図り、また、町の活性化は集落の活性化からという視点にたって、「これからもその集落に住もう、どうせ住むなら豊かで楽しい村がいい」を理念とするものです。そして、こんな素朴な願いを実現するため、自分には何が出来るか、何に汗が流せるか、住民一人ひとりが無(ゼロ)から有(イチ)への一步を踏み出そうという運動です。つまり、智頭町内の各集落または各地区がそれぞれの特色を一つだけ掘り起こし、外の社会に開くことによって、村の誇り(宝)づくりを推進する住民の自立と共有のマネジメントです。

【村おこし概念図】



- 村にある種をみつけよう！（種がなければ新たな種をまこう！）
- 土づくりや水やりをしよう！（誰でも参加できる雰囲気を作ろう！）
- 芽が出たら大きく育てよう！（皆で協力して活動しよう！）

【村おこし概念図】



- 外の社会と積極的に交流を行うため、情報化への取り組みを推進しよう！（交流・情報の柱）
- 住民自らが一步を踏み出す村づくりをしよう！（住民自治の柱）
- 村の生活や文化に附加価値をつけよう！（地域経営の柱）

「日本1 / 0村おこし運動」に対する支援

10年間の活動を支援します。

- ・集落の取り組み 集落が行う活動(ソフト事業)に対し、最初の2年間は年50万円、3年目から10年目までは年25万円の合計300万円を助成
- ・地区の取り組み 地区が行う活動(ソフト事業)に対し、最初の2年間は年100万円、3年目から10年目までは年50万円の合計600万円を助成

智頭町の認定法人とし、計画づくりなどに専門のアドバイザーや町職員(集落助っ人隊)を必要に応じて派遣します。

各集落振興協議会との交流会の開催や、村づくりのための情報を提供します。

町は必要に応じて計画の実行に対し、住民と協力していきます。

集落振興協議会規約の一例

第1条 私達は自らの一步により汗をかき、知恵を出し、力を合わせて、村の誇り(宝)づくりを行います。

第2条 運営の基本方針は次のとおりです。

1. 村の誇り(宝)を創造する。 (村の誇り(宝)づくり)
2. 住民自らの一步による村づくりと絆づくりを行う。 (住民自治)
3. 村の将来を見据えた計画をつくる。 (計画策定)
4. 外の社会(海外や都市)との交流を図る。 (国内外交流)
5. 村の生活・地域の文化の再評価を行い、付加価値化を図る。 (地域経営)

「日本1 / 0村おこし運動」の展開状況

- ・集落の取り組み 89集落のうち、16集落で取り組みを展開 (うち14集落は10年の助成期間が終了)
 - ・地区の取り組み 5地区のうち、2地区で取り組みを展開。1地区が設立予定。
- 「潤いと活力のある町づくり」優良地方公共団体自治大臣賞(1998年度)を受賞。